

しょううつしあさがおぼなし

生写朝顔話

〔解説〕

天保三年（一八三二）大坂竹本木々太夫座初演。全五段、時代物。文政年間、山田案山子（近松徳叟）が儒学者熊沢蕃山の作と伝えられる『露の干ぬ間』という小唄をもとに想を構え、「生写朝顔日記」と題した浄瑠璃を竹本重太夫の為に創作しましたが上演に至らず、それを翌年、近松柳が「徳叟遺稿朝顔日記」という読本にして人気を呼び、耶麻田加々子が添削して浄瑠璃に仕立てました。その後、嘉永三年（一八五〇）葦松園が添補潤色したものが、現在の作品の基礎となりました。この浄瑠璃は、道中の名所が次々と出て来て変化に富み、すれ道いや錯誤・道化・慟哭等様々なドラマの要素が含まれることから、よく上演される人気作となっています。また、『露の干ぬ間』に琴唄を取り入れて、音楽的にも特徴のある作品になっています。

〔あらすじ〕

宮城阿曾次郎と芸州岸戸の家老秋月弓之助の娘深雪は、京の宇治で出会い恋に落ちます。折しも阿曾次郎は鎌倉出張の命を受け、別れ際、朝顔の歌を扇に書いて深雪に与えました。急遽本国へと引上げる事になった秋月家の一行が明石で風待ちをしている時、深雪は偶然阿曾次郎と再会しますが、それも束の間、二人は再び別れ別れとなり、国へ帰った深雪は、父から駒沢次郎左衛門に嫁ぐよう言い渡されます。駒沢次郎左衛門とは、伯父の養子となり名を改めた宮城阿曾次郎だったのですが、それを知らぬ深雪は、思い余って家を出、阿曾次郎を探す旅に出ます。

放浪の末、辛苦から盲目となつた深雪は、三味線片手に唄を歌つて日々をしのいでいました。やがて深雪を探す乳母浅香と浜松で出会いますが、浅香は悪漢から深雪を守るため深手を負ひ、島田宿の父を尋ねるように言い残して息絶えます。

一方、駒沢次郎左衛門は岩代多喜太と共に島田の宿の戎屋に泊ります。岩代は同じ藩士であるものの悪人の一味で、しびれ薬で次郎左衛門を亡き者にしようとして企てますが、宿屋の主人徳右衛門の機転により失敗します。はからずもこの宿で盲目姿の深雪と再会した次郎左衛門でしたが、任務の途中とあつて、それと明かすこともできず、万感の思いで深雪の演奏する朝顔の唄を聞き、徳右衛門に目の秘薬を言付けて出立するのです。次郎左衛門が残した扇から、実は阿曾次郎であつた事を知つた深雪は慌てて後を追います。

〈大井川の段〉阿曾次郎を追つて大井川までやつてきた深雪ですが、一足遣いで大井川は川止めとなつてしまひます。失望の果て入水しようとした時、徳右衛門と下僕関助がかけつけ、深雪の祖父が大恩を受けた故主であると知つた徳右衛門は、甲子生まれの男子の生き血とともに飲めば薬効ありという薬を深雪に飲ませる為に切腹、薬を飲んだ深雪は薬効により目が開きます。

その後、深雪は次郎左衛門と再会し、晴れて夫婦となるのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

大井川の段

追うて行く

名に高き街道一の大井川、篠を乱して降る雨に、打ち交りたるはたたがみ、漲り落つる水音は物凄くもまたすさまじき

夫を慕う念力に道の難所も見えぬ目も、いとほぬ深雪が、こけつ転びつ、やうくこゝに川の傍

「ノウ川越^{かわし}たち。駒沢次郎左衛門様といふお侍。もう川をお越しなされたか。まだか聞かして聞かして」といふ声さへも息切れの声に川越口々に

「ヲ、その侍は今の先渡った。ガにはかの大水で川が止った、川止めく」

「ナニ、川が止まった。ハ、ア、悲しや」

と張詰めし力も落ちて伏転び、前後不覚に泣きけるが、また起上がって見えぬ目に、空を睨んで

「天道様、エ、聞こえませぬく、聞こえませぬわいなあ。この年月の艱難辛苦もどうぞま一度その人に逢はしてたべと片時も、祈らぬ間とてはないものを、けふに限つてこの大雨。川止めとは、く、エ、なにごとぞいの。思へばこの身は先の世で、いかなることの罪せしぞ。さてもく味気なや、焦がれ焦がれたその人に、逢うても知らぬ盲目の、この目はいかなる悪業ぞや。夫の後を恋ひ慕ひ、石になったる松浦瀉、ひれふる山の悲しみも、身に比べては数ならず、三千世界を尋ねても、こんな因果がまたと世にあるべきか」

と口説き立て、拳を握り、身をふるはし、流涕焦れ歎

きしはよその見る目も哀れなり。やゝあつて起き直り

「ヲ、さうぢや〜。とても添はれぬ身の業因。この川水のまさりしは、所詮死ねとのことなるべし。未来で添ふを樂しみに、こゝを三途の川と定め、^ぐ弘誓の船に法の道。急^{ぜい}がんもの」

と泣く〜も、夫を恋し小石の数、袖や袂に拾ひ込み

「南無阿弥陀仏」

の声諸共すでに飛ばんずその所へ

「ヤレお待ちなされ深雪様」

「イヤ〜、誰かは知らねど、放して〜」

「マア〜、待たつしやれ朝顔殿。コレ関助殿とや

らが見えたぞや」

「ハ、ア、下郎奴でござります。」

「さういう声は関助か。エ、遅かつた〜。遅かつたわいなう。この年月艱難して、尋ね焦れた阿曾次郎様に、折角逢うたに目くらの悲しさ。それとも知らず別れたれど、どうやらお声が気にかゝり、戻つて聞けばやっぱりその人。おのれやれ追付かうと、後追うて来ればこの川止め。関助、どうせう」

「ヲ、お道理だ」

「どうせう」

「御尤もだ」

「どうせう〜〜どうせうぞいの」

「御尤もでござりますわいやい。下郎奴がお目にかゝる上はお氣遣ひなされませぬ。駒沢様にお添はせ申す。しかし浅香殿は坂東巡礼となつて、東海道

へ尋ねて見える筈。ガお逢ひなされしかな」

「サレバイノ、その浅香に後の月、浜松で廻り逢うたが、その夜悪者に出逢ひ、数カ所の手疵。死ぬる今はにわしを呼び『島田の宿には私が生みの親古部三郎兵衛といふ人あり。この守り刀を証拠に尋ね行き、秋月弓之助が娘と名乗って逢へ』といひ教へ、可愛やつい死にやったわいの」

「ム、スリヤ浅香殿には最期とや。ホイ」

『はっ』とばかり驚く内

始終聞きゐる徳右衛門

「ム、そんならお前は秋月弓之助様の御息女様、また浅香というはわが娘であつたか、ム、」

と心にうなづき、くだんの短刀抜く手も見せず、腹へぐつと突立つれば、『こは何事』と驚く兩人

「ヲ、御不審は尤もだが、まづ――一通り聞いてたべ。ハ、ア私事はそのお尋ねなさるゝ古部三郎兵衛と申す者、則ちあなた様の祖父秋月兵部様には、三代相恩。若氣の誤り奥女中と忍び合ひ、お手討になるところを、弓之助様に助けられ、女もろとも国を立退き、産み落せしは女の子。伯母が方へこの短刀を添へて養子にやりしが、廻り廻りて思はずも親が命を助けられ秋月様へ御奉公。死んでも忠義を忘れず導きをつたか。オ、でかしをつたな。また最前駒沢様の仰せには、唐土伝来の目薬、甲子の年の男子の生血にて服する時は、いかなる眼病も即座に平癒とのこと。すなわち某甲子の生れなれば、わが血汐をもつてくだんの薬に調合し、早くあなたへお進め申せ。サ、早く――」

『実にも』と関助用意の水呑取出し、手負血汐を受
け止めく泣き居る深雪が懐の妙薬取り出し差寄す
れば、深雪受取り『わが夫の情に余る賜物』と押戴き
く、たゞ一口に飲み干せば、不思議やたちまち両
眼開き、蟻のはふまで見え透くにぞ、深雪が嬉しさ、
関助も悦び合ふぞ道理なる

「ア、嬉しや、もはやこの世に望みなし。いづれも
さらば」

『さらば』と刀引廻し、笛のくさを刎ね切つて、名
のみ流るる大井川、水の泡とぞなりにける。あとは
枕に取りすがり、わつとばかり泣く深雪。露の干ぬ
間の朝顔も、山田の恵みいや増る、茂れる朝顔物語、
末の世までも著し。